

歯科診療に関する標準化の現状について —在宅診療から医科歯科連携まで—

玉川 裕夫^{*1} 齊藤 孝親^{*2} 伊藤 豊^{*3} 五十嵐 勤^{*4} 鈴木 一郎^{*5}

^{*1}大阪大学歯学部附属病院 ^{*2}日本大学松戸歯学部 ^{*3}北海道大学病院 医療情報企画部

^{*4}五十嵐歯科医院 ^{*5}新潟大学医歯学総合病院

New Horizon of Standardization in Dental Health Care in Japan, - From domiciliary treatments to medico-dental information mix -

Tamagawa Hiroo^{*1} Saitoh Takachika^{*2} Itoh Yutaka^{*3} Igarashi Tsutomu^{*4}
Suzuki Ichiro^{*5}

^{*1}Osaka University Dental Hospital ^{*2}Nihon University School of Dentistry at Matsudo

^{*3}Hokkaido University Hospital Div. of Medical Informatics & Planning

^{*4}Igarashi Dental Clinic ^{*5}Niigata University Medical & Dental Hospital

The symposium's three main themes are "Present status of Japanese standard disease name codes in dentistry", "New proposal for dental revision of DICOM standard concerned with positioning information for digitized dental x-ray film" and "Needs for cooperation with dental and medical information mixture for regional health care system" based on the current status of standardization in dentistry in Japan.

The first speaker is Dr. Takachika Saito, the chairperson of the committee for standardization in dentistry in Japan, he will introduce us the present status of Japanese standard disease name codes in dentistry.

The second speaker is Dr. Yutaka Itoh, the main contributor of new proposal for dental revisions of DICOM standards concerned with positioning tags for digitized dental films in DICOM viewer; he will summarize the present status of his works.

The third speaker is Dr. Tsutomu Igarashi, a community dentist who works for domiciliary treatments with medical doctors in his home town, Niigata city, for long time, he will reveal us the real needs of information combination of medical and dental practice in case of treatments for home-bound patients.

Keywords: Standardization in Dentistry, Standard Disease Name in Dentistry, Intra Oral X-ray Images, Domiciliary Treatments, Medico-dental information mix

1. 企画要旨

大阪大学歯学部附属病院医療情報室
玉川裕夫

今回の共同企画では、歯科診療の標準化について、標準病名コード、放射線画像そして在宅診療での医科歯科連携の3つの領域に焦点を当て、話題提供とディスカッションを行います。

まず最初は、2011年12月に厚生労働省規格となった標準歯科病名マスターについて、齊藤孝親先生からその現状と残された課題をお話しいたします。MEDIS-DC歯科分野の標準化検討分科会委員長として支払い基金あるいは日本歯科医師会等との調整もしておられる立場から、未コード化傷病名への対応を含めてお話しいたします。多くの歯科医療関係者やシステム担当者が直面している問題を整理し、次に取り組むべき課題を示していただけるものと思います。

次に、伊藤豊先生に、歯科画像のなかでも現場で最もよく使われるデンタルフィルムの標準化に関する新たな動きを話していただきます。これは、日本医療情報学会だけでなく、日本歯科放射線学会、日本歯科放射線技術学会の3つがタイアップして進めているテーマで、画像ビューアでのデンタルフィルム表示方法の標準化に関するものです。国際的な視点も含めて、これまでの経緯と今後の方向性のお話いただきま

す。

最後に、在宅診療における情報共有について、新潟市秋葉区で地域の関連施設と緊密な連携をとり訪問歯科診療を進めておられる五十嵐勤先生にお話いただきます。五十嵐先生は同地区で在宅現場における多職種間の情報共有ツールとして活用されている地域連携手帳の策定と運用に携わってこられました。どのような情報がどのようなタイミングで使われているのかなど、医療情報交換について現場でやりとりされている内容を直接聞けるよい機会になると思います。

発表終了後に参加者とディスカッションを行い、歯科医療情報標準化について掘り下げて考えたいと思っております。

2. 厚生労働省標準規格「標準歯科病名マスター」の現状と課題

日本大学松戸歯学部社会歯科学講座(医療情報学)
一般財団法人医療情報システム開発センター
(MEDIS-DC) 歯科分野の標準化検討分科会
齊藤孝親

歯科電子カルテやレセプト電算処理歯科システムに対応した歯科用の標準病名マスターとしてMEDIS-

DCが提供している「標準歯科病名マスター」は、平成23年12月に「厚生労働省における保健医療情報分野の標準規格(厚生労働省標準規格)」として認められた。本マスターは、「ICD10対応標準病名マスター(以下、MEDIS病名マスター)」から歯科で使用する病名を抽出するとともに、歯科略称(カルテ表記略称名、レセプト表記略称名)、ICD-DA(歯科の国際疾病分類)など歯科独自項目を追加記載し、歯科で使いやすいマスターとなるようまとめたものである。V1.18では歯科病名基本テーブル2,881語、歯科索引テーブル12,512語を収載している。改訂は年4回、改訂内容はすべて、MEDIS病名マスター、傷病名マスター(厚生労働省が提供する医療保険請求に係る基本マスター)に同時反映されている。

本マスターをさらにご活用いただくため、その概要を再確認するとともに、課題となっている「未コード化傷病名」(傷病名コードで規定する傷病名と同一の傷病名でありながら異なる傷病名を用いて請求がなされているケース)の現状と対策について考える。

3. 口内撮影X線画像(Intraoral, IO)に関する標準化について

北海道大学病院医療情報企画部
伊藤 豊

口内撮影X線画像(Intraoral, IO画像)は、歯科領域で日常一般的な画像検査であるが、昨今そのデジタル化・フィルムレス化は、電子カルテと並び大きな課題の一つとなっている。しかしIO画像は、他のモダリティにない縦横の画像を複数毎組み合わせた複雑な表示レイアウトが必要であり、特にいわゆる全顎10枚ないし14枚を用いた撮影の場合、ビューア上で解剖学的な位置に基づいた精緻な画像配列が求められる。しかし現行のDICOM規格内においてその表示レイアウト等に関し明確な規定がないことから、IOビューア実

装に際しては、各施設・メーカーが独自の解釈及び拡張を行った上で実装しているのが現状である。その一方で、H24年3月、HIS, RIS, PACS, モダリティ間予約、会計、照射録情報連携 指針(JJ1017指針)が保険医療情報分野の標準規格として採択されたが、本規格においてもIOへの適用は遅れており、先の問題とあわせて早急な対応が望まれている。

今回これらの問題の解決に向けて、これまで日本歯科放射線学会や日本医療情報学会にて行ってきた取り組みと、さらには日本放射線技術学会にも協力をいただき進みつつある現況についての報告を行う。

4. 「在宅医療における情報共有」～地域連携手帳による医科歯科介護連携～

五十嵐 歯科医院
五十嵐 勤

在宅における患者及び介護サービス利用者の健康と生活の向上・維持を図る上で多職種協同は不可欠であり、その協同を円滑に進めるためにはその患者・利用者の情報の共有が必要である。新潟市秋葉区では情報共有ツールとして「地域連携手帳」を作製し、秋葉区で介護サービスを受ける全ての利用者に配布し、利用者・介護者に加え医師・歯科医師・薬剤師・訪問看護師等の医療関係者や、介護施設及びケアマネージャー等介護関係者が一つの手帳を利用する事によりその情報を共有し、また利用者・介護者だけでなく他の職種の関係者に情報提供を行っている。

今回の発表では「地域連携手帳」作製の経緯とその内容、また手帳を通して明らかになってきた在宅における医療や介護の現状と、これからの連携の課題等について述べてみたい。